

# 日本の風土と多自然川づくり

東京工業大学大学院 教授 桑子 敏雄

## 1. 出雲の風土から

斐伊川水系大橋川周辺まちづくりという大事業に関わってから2年半がたつ。昭和・平成のオロチ退治」といわれる治水事業の一環と位置づけられる大橋川改修とそれとともなう松江のまちづくりのための委員会、大橋川周辺まちづくり検討委員会の委員として、また、その委員会の作業部会長として、東京と出雲を何度も往復しながら、川づくりという課題に対して、風土を認識することがどれほど大切なことであるかを痛感している。

出雲といえば、出雲神話であり、出雲の風土を記載した『出雲風土記』である。斐伊川という日本を代表する河川の整備に人生の大事な時間を費やすことになった以上、この地方はどんなところなのか、その本質を把握してかからないといけない。そう思い、この地方の山々、川、平野を訪れ、その地形を見、そして、その地形のポイントに鎮座する神社に参拝した。神社のロケーションや祭神は、地域の人々の信仰や願望を教えてくれるからである。その数は、もう100を超えるほどになったろうか。

日本神話の神々のなかでも、もっとも魅力に富んでいるのは、黄泉の国から戻ったイザナギノミコトが日向の橘のあわぎ原での禊ぎの最後に、鼻を洗ったときに生まれたスサノオノミコトである。スサノオノミコトは、高天原でアマテラスと対立し、追放されて出雲鳥髪峰、現在の船通山に降り立った。斐伊川は、船通山のブナ林に源を発し、豊かな出雲の山地で多くの流れを合わせながら流れ下る。昔は、出雲平野に出てから再び向かいの山にぶつかるあたりで流れを西に変えて日本海に注いでいた。が、何度も洪水を繰り返す間に、江戸時代のはじめにその向きを東に変え、宍道湖に入り、現在は、松江市内を流れる大橋川を通して、中海へ、そして、境水道から日本海に流れ込んでいる。中国山地を多くの河川が刻んだ結果、この地方は複雑な地形となり、日本海側の気候の作用によって、この地域特有の風土を形成するに至った。斐伊川は、出雲の風土の形成の大きな力であるといってもよいし、また、出雲の風土が斐伊川の特質をつくりだしているといってもよい。

風土とは地形、地理、気候などによって形成されるものであるが、たんなる自然でもなければ、自然環境でもない。自然環境という言い方を利用するならば、人にとっての自然環境、人によって住まわれている自然環境といってもよいかもしれない。

「風土」ということばで思い出すのは、先に触れた

『風土記』である。なかでも完全な形で残っているのは、「出雲風土記」ただ一つである。その出雲風土記に記載されているのは、奈良時代の山や川の地誌、多くの神社名、そこに祀られている神々、そして物産である。

さて、なぜ風土記に神社や神々の名が記載されているのだろうか。それは、神社と神々が地域の人びとの風土に対する認識に深く関わっているからだというのがわたしの考えである。

たとえば、さきほど述べた斐伊川が出雲平野に出るあたり、久武（くむ）神社といわれる社がある。そこは、西に流れる斐伊川と宍道湖に挟まれた長い丘陵がだんだんと低くなって平野にとけ込んでいく先端部である。このような地形は、昔から日本の各地で「尾」と呼ばれてきた。わたしは、地域の風土を見分けるもっとも重要な手がかりは、尾を見分けることであると考えている。すなわち、尾とは、山と丘と川と平野が接するもっとも重要な地形だからである。

川は、山から平野に流れ出すとき、扇状地を形成する。扇状地とは、尾に挟まれて扇状に広がって傾斜する地形である。扇状地に出て、河川は分岐し、あるいは、伏流水となり、平地になったところで再び地上に出る。だが、水が湧くところは、扇状地だけではない。扇状地を挟む尾の裾、とくにその先端部が重要である。河川の水は農耕に利用するためには、コントロールが難しいのであるが、尾から出る水は、制御が容易である。河川の水は、ある時は洪水となり、ある時は渇水するが、尾の水は、涸れることがない。尾から出る水が涸れるということは、地域の人々の生存の危機なのである。

久武神社から少し東に寄った丘陵の奥に荒神谷（こうじんだに）遺跡が位置する。1983年、広域農道の建設のための調査によって発見された遺跡からは、銅剣358本、銅鐸6個、銅矛16本が出土し、出雲の古代文化を語る歴史的な発見となった。

なぜここにこうした大量の銅剣が埋められていたかについては謎とされるが、ここでひとつ大胆な仮説を立ててみよう。

遺跡は、「出雲の国風土記」に記載されている出雲郡の神名火（かんなび）山とされる仏経山（ぶっきょうさん）の北東に位置する斐川町神庭（かんばん）西谷にある。荒神谷遺跡と命名されたのは、遺跡の南側に『三宝荒神』が祭られていることによる。荒神（こうじん）とは、神の荒魂（あらみたま）、すなわち活動的な神霊であって、神の活動状態を意味す

る。すなわち、神の現れる場所である。神の威力が出現する場所なのである。

荒神谷遺跡は、先に述べたように、西に流れてから北へ向かう斐伊川の北側を東から西に伸びる長大な「尾」のなかにある。その尾の中心は、仏経山（ぶつきょうさん）である。一目見て分かるように、この山は、いわゆる神奈備山とはその形を異にしている。出雲国庁のある意宇川近くの茶臼山や大和の三輪山は、神の依り代にふさわしい穏やかな山容をしているが、仏経山は、そのような形をしていない。このことから推察すると、仏経山が神の依り代であること理由は、山容からではなく、別の理由によるものと推察される。その理由とは、この山が斐伊川に沿って東から西に伸びる長大な尾の中心、つまり、尾から湧き出す水の中心だということである。荒神谷遺跡は、この尾に入り込んだ長い谷戸状の水田のいちばん奥まったところにある。銅剣が埋まっていた丘の突端に立つと仏経山の森巖とした山容が望まれるのである。

『古事記』『日本書紀』を読むと、古代の天皇が祭祀を行うのは、干ばつのときが多い。洪水の被害の記述が少ないのは、大河川の近くには、人は住まず、また、その水を直接利用しないからである。ところが、干ばつはそうはいかない。神に頼るのは、洪水よりも、むしろ干ばつなのである。

古代、人々は干ばつの危機にどう対応したか。それは、尾の神に祈ることである。そして、その祭祀のための道具は、剣にほかならない。剣は「振る」ものであり、一振り、二振りと数える。たくさん「降る」ようにとの願いを込めて、神名火山の神に祈り、その剣を尾の丘の、山を望む小さな突端（尾の尾）の斜面に埋めた。これが荒神谷遺跡ではないか。スサノオがヤマタノオロチを退治し、その尾から取り出したのは、「天叢雲剣（あめのむらくものつるぎ）」であった。これもまた水に関係している。それは、おそらく雨を呼ぶ剣であったろう。宍道湖の北岸にスサノオノミコトを祭った大津野神社がある。この神社は津の森神社といわれている。津とは湊であり、「森」は「守」であって、水運の守り神として信仰されていたことが分かる。この神社には、船を湖にこぎ出して祈る雨乞いの祭りのことが伝承されている。スサノオノミコトは斐伊川を治めた神として知られるが、水を治める神とは、洪水を治める神ということだけでなく、雨をもたらし力をもった神でもあったということである。

## 2. 風土特性を見分ける力

荒神谷の仮説は、あくまで仮説であって、当たっているかどうかは分からない。わたしが言いたいのは、その仮説の妥当性ではなく、地域の風土特性を見分けることの大切さである。わたしは、風土を見分ける方法として、「地域空間の価値構造認識」とし

て「ふるさと見分け」を提案している。それは、

- (1) 空間の構造を理解する
- (2) 空間の履歴を掘り起こす
- (3) 人びとの関心・懸念を把握する

の3要素によって構成される。荒神谷の空間はその丘陵と河川、水田、水路などによって成り立っている。そこには長い年月をかけて蓄積された歴史がある。蓄積された歴史が現在の空間のもつ履歴である。履歴というのは、過去から蓄積され、現在に属し、未来に開かれている。履歴には、自然の営みと人びとの営みが積み重なっている。

水環境について、この地域空間の価値構造の観点から観察して見えてくることがある。それは、眼差しによって水の流れが違って見えることである。とくに近代的治水の視点から河川をみるならば、扇状地で分散していた河道を合流させ、できるだけ直線的にして、はやく海へ流すという形になっている。それはちょうど、手のひらを上に広げた形である。上流の多くの谷から流れ下る川は、一本に合わさり、大きな川となって下る。斐伊川で言えば、ヤマタノオロチの首が八本の支流にあたる。それが合流して斐伊川本川になる。

ところが、利水、すなわち農業用水の視点から見ると、大切なのは、扇状地から平野に流れ出る水である。利水の視点では、扇状地の扇頂部をコントロールすることが水を支配することになる。そこに頭首工を設置し、分水することによって平野は潤される。したがって、この視点から見ると、水の流れは、下に開く扇の形をしている。洪水管理の点から見ると、河川は手のひらを上に広げた形に見えるのに対し、利水の観点からすると、水は手のひらを下に向けたように流れてゆく。しかも、近代では、両手は重ならない。つまり、治水と利水を見る目は別々であった。

スサノオノミコトは、オロチに生け贄にされようとしていたクシナダヒメを目の細かい爪櫛に変えて髪に挿し、オロチと戦ったといわれている。クシナダヒメは、「奇稲田姫」と書かれる。稲田の女神である。稲田姫を祭る社は、櫛田宮といわれることもある。つまり、よい稲田は櫛田である。これは櫛のような細かな水路の整備された田を意味するであろう。つまり、オロチを退治したスサノオとクシナダとの結婚は、洪水リスクのコントロールと水田の恵みの統合を意味し、このことが国家成立の根源であるという神話になっているのである。斐伊川の扇状地に、そのような伝説をもつ神社があるということは、古代の人びとがどのように空間に意味を与えたかを物語っている。そこに古代の人びとの関心・懸念を把握する手がかりがある。空間の示す相貌の意味をどれほど深く読み解くことができるかということが、風土を深く知ることにつながるのである。

ところで、久武神社と同じ敷地に出西（しゅっさ

い) 八幡社が鎮座しており、社殿の下、丘陵の裾に沿って立派な農業用水路が流れている。こうした農業用水路は、大陸から伝えられた高度な農業技術による施設である。こうした施設を守るために置かれているのが八幡社である。八幡社は、日本の文化的伝承のうちで、非常に複雑な歴史をもつが、わたしが全国で見て回った八幡社は、主として、高度な技術によって建設された社会基盤の鎮守としての役割を担っている。農村地域では、農業用水路やため池の、海岸部では、港湾や水運の守り神である。これは、大陸の高度な技術を導入したとされる応神天皇が祭神であることと不可分である。

久武神社は、社地を移したとも伝えられているが、いずれにしても、スサノオノミコトと応神天皇が同じ敷地に鎮座していることは、この地が治水と利水を統合的に管理する重要な地点であることを物語っている。

### 3. 水路は曲がる

出西八幡の脇の農業用水路は、ゆるやかな曲線を描く丘陵の裾に沿って流れている。水路は、稲作の水の供給源として重要なのであるが、忘れてならないのは、水田は、たんに稲をつくるだけの空間ではないという認識をもつことである。水田は、近代に至るまで、稲を栽培するための空間であるとともに、そこにフナやドジョウやタニシなどタンパク源となる動物を採るための空間、あるいは、動物を増やすための空間であったということである。農耕と漁撈とは、稲作文化圏にあって食料供給のもっとも重要な基地であった。

水田が水棲生物の生息環境として機能するためには、水はゆるやかに、また、曲げて流れさせることが重要であった。なぜなら、曲がった川は、流速の変化をもつ。すると、瀬と淵ができる。浅いところと深いところができれば、水温も変わる。また、岸辺の植物の繁茂する状況にも変化がある。そこには、多様な生物が生息できる環境ができあがるのである。

洪水時にも、水が緩やかに流れることは、生物にとって重要なことであった。大雨のあと、川が増水して、魚たちが田んぼにあがったところを捕まえた思い出を語る高齢者は案外多い。生物にとっても激流に流されない環境が川の一部にあるか、川につながった場所があるかということが大事なことであらう。

河川もそうだが、農業用水路もまた、古代の人びとにとっては、曲がっていることが重要であった。そこで、扇状地の扇頂部から水を引いた水路は、尾の裾をたどるように流し、そのうねった水路から分水していったのである。古代では、農業用水路は、「溝」と書いて「うなで」と読んだ。うなでとは、「うねる」「うなぐ」手である。つまり、曲がってい

る水路という意味なのである。

繰り返すが、最近の研究では、稲作はじつは漁撈と一体であった。米とならんで、重要なタンパク源は、河川や田んぼ、あるいはため池で供給された。そのことを近代治水、近代利水は忘れてしまったのである。とくに戦後の交通体系の整備や冷蔵庫の普及は、山間部でのタンパク源供給にも海産資源の消費を可能にしたので、地域が自前で供給する必要がなくなった。さらに農地では、圃場整備が進められ、水路はU字溝になり、大量の農薬が散布されて、害虫の駆除を目的としながら、益虫も、あるいは、どうでもいい虫（害虫でも益虫でもない虫）も殺されていった。このことは、農業が稲作を目標とするという近代農業のコンセプトによって遂行されていったことを意味している。

同様に、水害対策としての治水が洪水対策一辺倒になっていったのが近代治水である。治水とは水を治めることであるが、洪水が起きないようにすることを目標にして、河川に生息する多くの生き物たちのことを考えなくなったのは、近代河川整備のコンセプトによるものであった。ここでわたしが「コンセプト」というのは、川というものをどういう「考え」で捉えるかということの意味している。机上で考えてから河畔に佇み、コンセプトをどう適用するかを考えるだけならば、その日には、豊かな暮らしや生き物たちの息づかいは「見れども見えず、聞けども聞かえず」であろう。それでは、河川の風土的特性の全体を捉え、そこに生きる人々、生息する生物たちの全体に配慮する河川整備の視野は開けてこない。

風土的視点で河川を見るというのは、まず、河川空間に身を置き、五感の全体を開き、そこに見えるもの、聞こえる音、匂いや味といった要素がどう風土の景観つくっているかを捉えるということである。「風土の景観」を「風景」といってもよい。水辺に立って「全体を見る」という言葉は、柳川の堀を埋め立てから守った広松伝の言葉であった。全体を見るということ語ったとき、広松は、地球と有明海の歴史から語り出し、掘り割りの長い歴史を紐解き、埋め立ての危機について、また、その危機の克服について述べ、そして、こどもたちの水辺の遊びの喜びにまで話を進めたのである。

### 4. 多自然川づくりと包括的再生

豊かな生態系を実現するための多自然川づくりとは、実は伝統的な日本の治水思想のうちにあったということもできる。この場合の治水とは、決して洪水を防ぐという意味ではない。豊かな生態系を実現し、また、人びととの生活をつなぐ水環境のコントロールのことを意味しているのである。

「多自然川づくり基本指針」は、「多自然川づくり」を「河川全体の自然の営みを視野に入れ、地域の暮

らしや歴史・文化との調和にも配慮し、河川が本来有している生物の生息・生育・繁殖環境及び多様な河川景観を保全・創出するために、河川管理を行うことをいう」と定義している。地域の暮らしや歴史・文化との調和に対する配慮を謳っているのも、風土的視点の重要性を認識しているからである。

スサノオノミコトは、中世の伝承のなかで牛頭天王（ごずてんのう）という大陸伝来の神と習合した。天王山や天王川という地名は、牛頭天王、すなわち、スサノオノミコトに由来する。その「天王川」と名づけられた小さな河川が新潟県佐渡島にある。小佐渡山脈から長く伸びた尾が加茂湖にとどく先端に鎮座するのが牛尾神社である。社の鎮座する地形と牛尾神社と天王川の名前から、この社を祀った人びとが天王川の氾濫を管理し、また農業用水が枯渇しないようにとの願いを込めて祀ったことが分かる。

いま天王川を含む地域にトキを放鳥する計画が進められている。日本産のトキが絶滅したのは、すでに述べたような水環境の変化であると考えられるので、トキを野生復帰させるためには、トキの再生だけでなく、むしろ環境の再生、とくに水環境の再生が不可欠である。この事業には、環境省、農水省、国交省、新潟県、佐渡市など多様な政府機関・自治体や地域住民、NPOなど多様な関係者が関係している。天王川の再生を目指す多自然川づくりは、地方の中小河川の再生という点で先駆的な事業になるであろう。そこでは、生物多様性、農業・農村の多面的機能とならんで、多自然川づくりが重要な役割を果たす。

わたしは、環境省の研究事業の一環として、佐渡島の地域社会がトキを迎えることができるような自然再生の姿、地域再生の姿をどのように描くかということを目指し、ワークショップ（佐渡巡りトキを語る移動談義所）を繰り返してきた。また、新潟県主催の天王川再生のためのワークショップ（座談会）の進行役も務めた。そのような過程で明らかになってきたのは、「包括的再生」の概念である。この概念には、いま述べた三つの「た」すなわち「生物多様性」「農業・農村の多面的機能」「多自然川づくり」を「佐渡島」の「里地・里山」の「さ」という地域性で包括するという意味も含まれる。さらに、この「包括」の思想を、

- ① 山から海への水の道を緩やかに柔らかくつなぐ
- ② 自然という恵みと人々の暮らしぶりをつなぐ
- ③ 地域のもつ恵みとリスクの負担をつなぐ
- ④ 制度と行政の仕組みの切れ目をつなぐ

という4つの「つなぐ」として捉え、さらに「山と川と湖と海の恵みをつなぐ包括的再生」として性格づけた。

すでに述べたように、風土的視野をもつ河川整備は、机上のコンセプトによって河川空間の再編を進めるやり方とは対照的な方法である。河川の限定さ

れた機能を特化して進める川づくりは、特定の視点からのみ川を見て評価する。そのような目で見ると、川は、そのような目に見える形でしか姿を現さない。

先に引用したように、多自然川づくりとは、「河川全体の自然の営みを視野に入れ、地域の暮らしや歴史・文化との調和にも配慮し、河川が本来有している生物の生息・生育・繁殖環境及び多様な河川景観を保全・創出するために、河川管理を行う」ということである。自然の営みや地域の暮らしのなかには、生態系の視点や農業の視点も不可欠である。それらの視点を包括すること、そして、それを包括できる姿勢をもつためにこそ、まず、河川空間の全体のなかに身を置いて、その風土的全体像を把握すること、このことが必要であろう。机上のコンセプトで川を再生しても、それは、型にはまった自然再生にしかない。型にはまることのない多自然川づくりには、まず、担当者、当事者、関係者、地域住民が地域の空間に身を置き、そこでなにを感じるのか、なにを大切なのかを考えなければならない。

では、河川の多様な姿を捉えるのはどうしたらいいのだろうか。多様な姿は多様な視線で捉える・・・これがもっとも簡単な方法である。つまり、多くの人々がどのような目で川を見たのか、見ているのか、これから見ようとするのかをお互いに共有し、そこから河川の豊かさを実現するにはどうしたらいいかを議論するのである。

しかし、意見のなかには、多くの違いがあるかもしれないし、対立する見方もあるかもしれない。それを克服する創造的な議論もまた、多自然川づくりのなかに含まれなければならない。多様な意見、時には対立する意見を創造的にまとめあげる合意形成の手法が必要とされるのは、これが理由である。多自然川づくりには、一つの視点、限られた視線で川を見るのではなく、多様な視点、多彩な視線のもとで、日本の川の豊かさを見つめ直し、再生してゆくプロセスが必要なのである。

多自然川づくりは、日本の川の豊かさを再生する事業、真の意味での水を治める事業の中心に位置しなければならない。治水の課題を論じているとき、「人間の命とオオサンショウウオの命とどっちが大事なんだ」という意見がしばしば出される。このような意見には、「どっちも大事だ」と答えるべきであろう。両方を大事にする河川整備はどうすれば可能なのかを考えること、二者択一的な思考から脱すること、この思考の方法を学ぶこともまた多自然川づくりの基本ではないか。豊かな川の生態系や人間の暮らしぶりを排除する治水は、治水の名に値しないからである。多自然川づくりを進める治水が実現するとき、21世紀の日本の河川は、豊かさを実現する治水事業となるであろう。